認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク　ニュースレター　2019 年 10 月 30 日発行

サロベツ原野だより

Vol.13 －No.3

〒098-4122
北海道天塩郡豊富町
字豊富東２条５丁目
TEL (0162)82-3950
FAX (0162)73-0360
ホームページ URL http://www.sarobetsu.or.jp　E-mail: info@sarobetsu.or.jp

＜９月７日（土）、サロベツ・エコモーDay が開催されました。当日は屋内・屋内外共に多くのお客様で賑わっていました。＞

目　　次

１．お知らせ……P.1
２．活動報告
（１）エコモーDay2019 開催…… P. 2～3
川﨑　正大
（２）自然再生全国会議出張報告……P. 4～5
嶋崎　暁啓
（３）サロベツのチュウヒ 2019……P. 5～6
長谷部　真
３．コラム
（１）サロベツ今昔物語……P.7
野口　多美治
４．事務局からのお知らせ
（1）湿原センター情報……P.7
廣瀬　実穂子
（2）サロベツ四季の旅……P.8

1．お知らせ

どんグリーンの森づくり開催！

稚咲内砂丘林再生活動の一環として、今年も「どんグリーンの森づくり」を開催します。当活動は平成 17 年度より地域と行政が一体となり、ミズナラ苗木を管理育成し、植樹活動を継続的に展開してきました。今年は 200 本程度植樹する予定です。是非ご参加下さい！

日時：令和元年 11 月２日（土）小雨決行
集合：旧稚咲内小学校校庭　10:00
※植樹後、昼食を用意しております！
服装等：防寒着、長靴、帽子、軍手

2．活動報告
（１）サロベツ・エコモーDay2019 開催

川﨑 正大（豊富町・ＮＰＯ職員）

９月７日（土）、サロベツ湿原センターにて今年で９回目となる「サロベツ・エコモーDay」が開催されました。今年は初めての試みとして、豊富町観光協会様主催の「サロベツ★らぼ」と同時開催という事もあり、延べ来場者数はエコモーDay としては過去最多の約 470 名の方々にお越し頂きました。

このエコモーDay とはサロベツで取り組まれている「湿原」と「農業」の共生を目指して行う「自然再生事業」について地域の方々や観光客の方々により身近に感じていただくための普及推進を図るイベントとなっています。

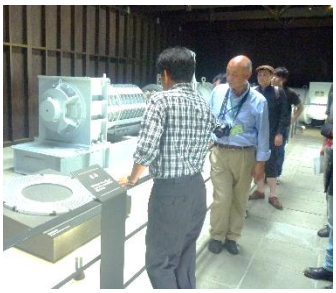
それでは、今年のエコモーDay の企画内容について報告したいと思います。館内では「自然再生パネル展＆クイズラリー」、「豊富町産の生クリームを使ったバター作り体験」、「湿原植物をイメージしたアロマ香油づくり」、「豊富町観光 PR 」、「エコモーday 講演会＆座談会」の５企画、屋外では毎年大人気の豊富消防署様による「はしご車からの湿原展望」、JA 北宗谷様・同青年部様のご協力による「ハーベスタ展示」や「牧草ロール＆乾草ベッド展示」、「地元小学生による木道ガイド」のほか、泥炭採掘工場の操業当時に勤務されたいた方を講師にお招きした「浚渫船解説ツアー」、「レストハウスの限定メニュー販売」が行われました。

自然再生パネル展＆クイズラリーでは、クイズを通して湿原と人との関わりや各省庁が取り組む自然再生事業について紹介されていました。景品には豊富牛乳公社様のご厚意により「豊富飲むヨーグルト」を提供していただき、その濃厚な味にご参加頂いた皆様もご満足のようでした。

バター作り体験では、試食用にサロベツマイハート様から食パンを、豊富牛乳公社様から生クリームのご提供を頂き、豊富バターの美味しさに参加した皆様は舌鼓！アロマ香油づくりは予約制だったのですが、定員を上回るお客様にご参加いただき、思い思いの湿原の香りをブレンドした香油づくりを楽しんでおられました。

屋外での企画で特に目を引いたのは、やはり毎年大好評の「はしご車からの湿原展望」でしょうか。開始早々、親子連れを中心に長い列ができ、普段は乗ることができないはしご車と、はしご車からの展望に大満足の様子!その他、「ハーベスタ展示」、「牧草ロール展示」「牧草ベッド」も今年も好評で子供たちも各々楽しんでいました。

湿原センター隣のレストハウスでは、今年もエコモーDay に併せた限定メニューの販売が行われ、巷で話題のタピオカドリンクやチーズを衣で巻いて焼いたハットグなどの販売が行われ、完売の商品も出るなど館内は盛況でした。浚渫船解説ツアーでは、実際に浚渫船を操縦されていた方のガイドとあって、採掘での苦労話や浚渫船の操縦方法、工場でのエピソードなど当事者にしか分からない貴重なお話をしていただけました。参加者の皆さんも熱心に話を聴いておられ、より熱心な質問が次から次へと飛び出し、浚渫船や泥炭の加工について深く学ぶことができました。



小学生による木道ガイドでは、「なまら!!サロベツ∞クラブ」の子供たちが普段歩きなれている木道で秋の花や湿原の成り立ち、野鳥などについて案内しました。参加した皆さんからも「へぇ～。」「よく知っているね。」といった感想が聞かれ子供たちも自信につながったようです。

イベント最後を飾る「エコモーDay 講演会＆座談会」では、「～つなぐ、つながる農業、そして地域づくりへ～」をテーマにサロベツ農事連絡会議の山本議長から豊富開拓の歴史や酪農業、また自然再生事業でも取り組んでいる「緩衝帯」設置に至るまでの農家さんとの交渉話等について、豊富牛乳公社の藤原社長からは豊富牛乳公社の事業概要・PR や商品紹介について、それぞれご講演頂いた後、地元・豊富高校の生徒さんも交えた座談会を開催しました。湿原の保全と農業の効率化を両立することは、以前からの課題であり、多くの困難を地域で一丸となって乗り越えてきたことがわかりました。地域の皆様の努力と苦労に支えられて、豊富のおいしい牛乳が飲めることを改めて感じた一時間でした。

さて、今年のエコモーDay も多くの皆様のご協力・ご支援のおかげで無事に終了することができました。ご協力いただいた皆様、また当日会場に足を運んでいただいた皆様に改めて感謝申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

（２）自然再全国会議出張報告

嶋崎 暁啓（豊富町・ＮＰＯ職員）

現在、全国には上サロベツ自然再生協議会と同じような国の自然再生推進法に基づく法定協議会が 26 ヵ所あり、それぞれ自然再生事業が行われています。その関係者が年に一度集まる全国会議が、９月 18 日（水）～19 日（木）に山口県の「椹野川（ふしのがわ）河口域・干潟自然再生協議会」をホストとして行われました。今回、私は６年ぶりにこの全国会議に出席して来ました。

涼しい稚内を発ち、羽田経由で山口空港に降り立つと、現地の気温は 30℃！気温差は 15℃もあり、一気に熱中症のリスクに見舞われました…。会場のホテルに着くと、関係者約 70 名が集まっており、最初に現地の協議会の取り組み紹介があり、その後、事業地の見学に出発しました。

現地で専門家の方から解説を受けるメンバー（テレビの取材も）

椹野川河口域は、かつてはアサリやエビの良好な漁場だったそうですが、干拓事業により海岸や干潟が失われると共に、底質の泥状化、硬質化など、自然環境が悪化してしまいました。

現在は、市民活動で干潟を耕耘したり、アサリを保護する被覆ネットを設置するなど様々な取り組みを進め、豊かな「里海（さとうみ）」を取り戻すことを目指しています。

現地視察ではシオマネキやトビハゼなどの干潟の生物を観察したり、絶滅危惧 IA 類のカブトガニの調査体験をさせていただきました。里海の素晴らしさを感じられる、とても貴重な経験ができました。ちなみに、椹野川河口域では企業とも連携し、ボランティア活動があるときは「伊藤園」さんがお茶を提供して下さるそうです。

干潟は様々な生き物の楽園だと実感

生きているカブトガニを初めて見て感激＆面白い

次に向かった先は、「きらら浜自然観察公園」です。この場所は、元々干拓の予定地だった場所が、県によって 30ha 残され、公園として整備されたそうです。クロツラヘラサギが 30 羽も飛来する渡り鳥の交差点と言うべき場所で、とても立派なビジターセンターが建っており、現地の NPO 法人が指定管理者として運営していました。山口県の所有施設で、スタッフは充実の 10 名体制（とても羨ましい…）とのことでした。園内に設けられた５つの水辺ゾーンは人工的に管理されているとのことでしたが、かなり自然状態に近く、良好に見えました。今後はラムサール条約への登録を目指していきたいそうです。

そうこうしているうちに、あっという間に夜になり、懇親会では全国の協議会関係者や専門家、行政機関の方々と大いに交流できました。

２日目は自然再生に関する法律改正の動きや、各協議会からの情報提供がありました。その後は分科会が行われ、「①協議会の設立」「②人材の育

成・確保」「③資金の確保」の３グループに分かれてワークショップを行いました。私は「人材の育成・確保」のグループに入り、サロベツでの取り組みを紹介しました。

他の協議会では、自然再生を企業と連携して進めていたり、分かりやすく伝えるためにデザイン学校と協力している事例などを教えていただきました。今回、久しぶりに全国会議に出席しましたが、やはり各協議会の取り組み内容は学ぶべき点があり、大いに刺激を受けました。これをどのようにサロベツの関係者と共有し、活かしていくかという部分が今後大切だと思います。また、本州においては、人間の管理が行き届かないことにより生態系の劣化が起きる「アンダーユース」の問題を抱えている協議会が多い印象を受けました。

グループワークでは、資金・人材はどの協議会も苦労をしながら運営していることが良く分かりました。他の協議会では、事務局が寄附金などからなる財源を持っているケースが増えているようであり、サロベツも可能であれば検討する価値があるのではないかと思いました。特に SDGs（持続可能な開発目標）を生かして企業と連携する取り組みは参考になると思いました。一方、人材育成や普及については、サロベツで行われているエコモー・プロジェクトや小中高校との連携など、独自の取り組みができていると感じました。

今回は法律改正など、中央の最新情報を知り、全国の協議会関係者や専門家の先生方と知り合えたので、情報交換、人脈作りとしても価値がある会議でした。また機会がありましたら、サロベツから出席できると良いと思います。

（３）サロベツのチュウヒ 2019

長谷部 真（豊富町・NPO 職員）

チュウヒは日本で唯一繁殖する草原性のタカで、巣を草原の中に作ります（図 1、図 2）。日本では主に北海道と東北北部で繁殖します。繁殖つがい数は 100-150 程度で少なく、絶滅が心配されています。サロベツでは 30-50 つがい繁殖しており、日本最大の繁殖地の可能性があります。しかしながら、国立公園などの保護区にある巣は全体の 1/4 程度にとどまり、それ以外は、河川・湖沼沿いの原野や、農地（耕作放棄地）にあります。チュウヒは牧草地などの人の近くにも採餌のために現れます。このため、農業開発・河川開発・道路開発などにより、影響を受けやすく、巣の存在がわかりにくいため、知らず知らずのうちに繁殖環境が失われることが度々起こってきました（図 2）。このため、私たちは 2019 年チュウヒが繁殖を開始する 4-5 月にチュウヒの繁殖情報を収集し、それを開発事業者に提供し、チュウヒへの配慮を促しました。

図１　チュウヒ雌成鳥

開発事業者の中には独自に繁殖情報を収集し、チュウヒの繁殖状況を把握し、監視員を配置するなど、配慮しながら工事を行っている事業者もあり、この事業者からは繁殖状況の情報を提供してもらいました。私たちの調査範囲は稚内市から天塩町にまた

がり、1 箇所で多くの時間を費やすことができませんので、情報提供のおかげで有用な情報を受け取ることができました。

図 2　チュウヒの巣　周りから全く見えないササ藪の地上にある。

また、提供した情報を内部の繁殖情報の中に加え、工事を行う際に保全事業に役立てている事業者もいました。しかし一方では、事業者の中でも部署ごとに対応に差があり、こちらが提供した情報が十分に活用されておらず、結果的にチュウヒが繁殖を途中でやめてしまった（工事による可能性あり）事例もありました（図 3）。

図 3　飛翔するチュウヒのそばで行われる工事

送電線事業者の場合には、いつのまにかチュウヒの繁殖地だった場所が資材置き場になっていたり、チュウヒの生息環境で工事が行われたりしたこともありました（図 4、図 5）。そのほか、チュウヒの繁殖地情報を知らせ、配慮を促しても無視され、工事を強行した事業者もありました。

今後のチュウヒの保全に向けて、引き続きチュウヒの繁殖情報を収集し、事業者に情報提供または情報共有をし、配慮を促すことが重要です。

実際にチュウヒの保護区以外の繁殖地は耕作に向かない原野や耕作放棄地などがほとんどで、何か特別な理由があれば真っ先に開発されてしまいます。このため、チュウヒの繁殖地をナショナル・トラスト運動などにより購入し、開発から守ることも重要です。

図 4　チュウヒの繁殖地に突然建設された送電線工事の資材置き場。環境影響評価事業ではないため、事前に情報を得ることは困難。

図 5　チュウヒの生息環境に次々と建設される送電線。

一方で、チュウヒはタカの仲間でありながら、オジロワシ、オオワシなどと比較して、地味な存在です。絶滅危惧種で種の保存法に指定されていますが、その存在は地元サロベツでも広く知れ渡っていません。このため、普及啓発活動により、チュウヒの存在を広く知ってもらうことが大切です。チュウヒはサロベツで夏になれば、それほど見ることは難しくありません。しかし、日本海側の遠別町より南やオホーツク海側に抜けるとその姿はほとんど見ることができません。また、北海道中を探してもそう易々と観察できる鳥ではなく、チュウヒにとってサロベツは良好な繁殖環境であるに違いありません。今後もサロベツでずっとチュウヒの姿が見られるよう、保全活動を続けて行きます。

4. コラム
（1）サロベツ今昔物語
～自分の中の昭和史（23）～

野口　多美治（豊富町・郷土研究会）

11 月に入って中野での下宿生活にも変化が起きる。同部屋生活だったことＭ君が家庭の事情で東京での大学受験を断念し、北大受験に進路変更を余儀なくされた。ここの下宿へは２人契約であったため改めて大家さんとの話し合いに入る事になった。しかし下宿代の面で隔たりが大きく話し合いは難航した。自分にとってはとても住みよい場所だったが今後の生活での経済面を考えたとき、残念ながら出ることを決断せざるを得なかった。

東京といえども、11 月～3 月の冬場特に夜は底冷えのする寒い日々を過ごさなければならない。こんな時期にまた住居探しをしなければならないとは情けない限りであった。以前世話になった周旋屋さんにまたお願いし中野に住居を確保して引っ越しをする。今回は下宿ではなく一軒家であった。行ってみて驚く、東京にまだこんなところがあったとは思いもよらなかったのである。

狭い円周の敷地に 6 軒の家が立ち並んでいた。円の中央には炊事場と洗濯場が、同じ円周の中に共同トイレが建っている。1 件の間取りは 6～7 畳間で統一されており、ガス施設と小さな水道施設があるのみ。明り取りの窓は 1 個だけ設置されていた。いわゆる最低の自炊生活が可能なバラックの 1 戸建てであった。しかし、今更後には引けない。厳しい生活を想像しながらバラックでの孤独な生活が始まったのである。

想像していた通り夜は寒く頭まで布団をかぶり夜明けを待ちわびる生活が昭和 32 年３月まで続く。家には引っ越した旨のみ連絡。冬休みも帰郷せずアルバイトと制作活動に没頭する。

（～次回へ～）

4. 事務局からのお知らせ
（1）湿原センター情報

廣瀬　実穂子（幌延町・ＮＰＯ職員）

代わる代わる咲いていたお花の季節も流れるように終わってしまい、サロベツでは小鳥たちのさえずりの代わりに、たくさんのヒシクイたちの声が聞こえる季節となりました。

利尻富士は、昨年より 23 日間も早い９月 20 日に雪化粧し、青々としていた原野も草紅葉に衣替えしました。木道沿いにはヨシやホロムイスゲがススキのような白い綿毛をなびかせており、とっても幻想的です。

木道を散策すると、足元のヤチヤナギやイソツツジはもう来年に向けて冬芽をつけており、一見お休みしているように見えて、一生懸命来年の準備をしていることに気付かされます。

サロベツにはこれから厳しい冬がやってきます。動物たちにも人間にも過酷な季節ですが、一面の銀世界は目を見張るものがありますので、ぜひ（天気の良い日に）みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

冬芽をつけたヤチヤナギ（左）とイソツツジ（右）

（２）サロベツ四季の旅

花が終わった後の静かな楽しみ。それが「実」や「種」の観察だ。どうしても、綺麗で目立つ「花」ばかりに目がいきがちだが、そもそも植物たちは子孫を残すために一生懸命に美しい花を咲かせている。つまり、実や種がその植物の生きた証、集大成とも言えるものであり、もっと注目を浴びても良いはずだ。それに、実や種の世界は、特徴や違いが分かるようになってくると案外面白い。図鑑などには載っていない場合も多いので、まずは詳しい人に教えてもらうと良いだろう。

ノハナショウブは半月型の種が顔をのぞかせる

この楽しみ方のベテランになって来ると、実が残っている様子から、花が咲いている時期の情景を具体的に想像できるようになる。「きっとこの場所に７月頃に来たら、たくさん〇〇の花が咲いているはずだ！」という感じに…。植物たちの「ビフォワー・アフター」に思いを馳せながら、ぜひ秋の湿原を歩いてみていただきたい。

花の終わったミヤマアキノキリンソウ

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークとは？

当法人は、サロベツ及び周辺の自然と地域を愛する人々が集い、自然環境の保全活動、調査研究活動及び環境教育活動を通して、自然と人間との共存の大切さを広く啓蒙し、併せて地域の発展、まちの活性化に寄与し、サロベツ及び周辺の豊かで美しい自然を次世代に引き継ぐことを目的とて平成 16 年５月に設立されました。

活動の目的にご理解いただき、共に汗を流し、ご協力下さる会員を随時募集しております。あなたの参加が活動を支えます。どうぞご加入ください。

会員になっていただける方は事務局までご一報下さい。申込方法と会費の振込先をご連絡いたします。また、会の運営を支えるご寄附も随時受け付けております。（３千円以上のご寄附は各種税控除の対象となります。詳しくは事務局まで。）

＜10 月 30 日現在の会員数＞

正会員 68 名 ／ 賛助会員 25 団体・10 個人

サポート会員 125 名 ⇒ 計 228 名・団体

※転勤などでお引越しをされた方は、住所変更のご連絡を事務局までご連絡ください。（連絡先は表紙の上部に表示しています）